

ナショナリズム ドイツとは何か

共産主義が倒したはずのナチズム 統一ドイツの行方は 続・旧東独出身者との対話

【14】ナショナリズム ドイツとは何か／ベルリン⑤ 現代史凝縮の地

藤田直央 朝日新聞編集委員（日本政治、外交、安全保障）

2020年08月20日



旧東ドイツの頃と再統一後について話すベアーテ・ヴォンデさん＝2月、ベルリンの森鷗外記念館。藤田撮影

ベルリンの黄昏、市街を縫うローカル線が高架を行く。線路の軋みが二階の窓越しに響いてくる。

かつての森鷗外の下宿にあるフンボルト大学の森鷗外記念館を2月14日に訪ね、日独の文化交流を支えてきた副館長のベアーテ・ヴォンデさん(65)の話を、[前回](#) に続き紹介する。冷戦が始まって間もない1954年、東ドイツのポーランド国境の街に生まれてからの半生だ。



森鷗外がベルリン留学中に下宿で使っていた机＝2月、ベルリンの森鷗外記念館。藤田撮影

戦後の西ドイツでは、ナチス時代の直視を避ける親と、向き合おうとする子の世代間の葛藤があった。東ドイツでも形は違えど、ナチズムからドイツを解放した共産主義という史観の下に教育を受けたヴォンデさんと、ドイツ軍兵士だった父の間に確執があった。

それをヴォンデさんが俯瞰（ふかん）できているのは現在の話だ。1973年に東ベルリン側にあったフンボルト大学に進んだ頃は、建国第一世代の私たちが東ドイツを導くのだ、という思いにあふれていた。

「戦後に新しい世界、新しい国を造ろうと、先へ先へと進んでいました。世界が平和になるための架け橋になろうと日本学科を選びましたが、入学の年に東ベルリンであった世界青年学生祭典は素晴らしかった。世界中から学生が集まり、一緒に平和の歌を歌いました」



ベルリンのフンボルト大学。東ドイツ時代にヴォンデさんが通った=2月、藤田撮影

世界青年学生祭典とは、戦後に共産主義や非同盟の諸国で数年ごとに開かれてきたものだ。東ドイツ政府は人が増えすぎるという理由で、祭典期間中に西ベルリン在住者の立ち入りを禁じた。1970年代には米ソが一時緊張緩和に向かい、東西両ドイツにも歩み寄る機運があったが、それでも壁は高かった。

これは、ナチズムというナショナリズムの暴走と敗戦の報いとは言え、近代国家において国民としてのまとまりを模索し続けるドイツが冷戦で分断された矛盾の表れだった。

東ドイツは新たな国としてまとまる理念を共産主義というイデオロギーに頼ったが、西ドイツとの経済格差は開くばかりだった。政府批判や国外脱出を押さえようと政府が言論や移動の自由を制限したことが、国民の不満を高めた。そんな政府のかたくなはヴォンデさんも「BOKETERU（ぼけてる）」と日本語で振り返った。



1989年10月、東ドイツのライプツヒで起きた民主化要求の大規模デモ=DPA通信

1980年代になってソ連にゴルバチョフ書記長が登場。共産主義の盟主自身が経済の停滞を認め、打破しようと改革を掲げた。それを東ドイツが拒んだことが、そもそも何のために分断されているのだという国民の不満をさらに高める。東ドイツ政府が普及を進めたテレビは、一部地域を除いて西ドイツの放送も受信でき、情報統制は形骸化していた。

東ドイツで建国20周年を記念して東ベルリンにテレビ塔が建ち、それからさらに20年経った1989年、政府が建国40周年を祝うさなかに“Wir sind das Volk”（我々が人民＝主権者だ）というデモが広がった。ベルリンでは人々が東から西へ流れ出し、壁が崩れた。

さらに1990年の東ドイツ総選挙で“Wir sind ein Volk”(我々是一个の民族だ)という訴えが席卷し、41年ぶりに東西ドイツは再統一された。



1990年3月、東ドイツの総選挙で西ドイツとの早期統一を求める勢力が勝ち、東ベルリンで西ドイツの国旗を振って喜ぶ人々=朝日新聞社

世界では1989年のベルリンの壁崩壊直後に米ソが和解して冷戦が終わり、91年にはソ連が崩壊していた。それが時代の流れだ。私はヴォンデさんにその後のことも聞きたかった。温めていた質問を切り出した。

なぜ新興右翼が伸びるのか

旧東ドイツの地域で、いま中東からの難民受け入れ拒否など排外主義を叫ぶ新興右翼政党・ドイツのための選択肢（AfD）が伸びている。それはなぜなのか。



新興右翼政党AfD（ドイツのための選択肢）のサイトより

ヴォンデさんの話からすれば、共産主義の東ドイツで教育を受けた世代には、反ナチス教育が徹底されていた。そして再統一後の世代には、私が今回のドイツの旅で垣間見たような、ナチズムへの反省をもって民主主義を陶冶しようとする西ドイツの教育が広がったはずだ。

「ええ。東ドイツで私たちの世代にナチスは根絶されたはずなんです。だから、いまAfDが東側から出てくるのが理解できない。本当に恥ずかしい」。再統一後も「国境の架け橋」を自任してフンボルト大学で日独の交流に努め、3人の子を育て上げたヴォンデさんは、頭を抱えてしまった。

それでもこの30年を振り返り、いろいろと考えながら話してくれたことは、私なりに咀嚼すれば、旧西ドイツに吸収された旧東ドイツ社会の喪失感だった。

その言葉を丁寧に拾っておきたい。



旧東ドイツの頃と再統一後について話すベアーテ・ヴォンデさん＝2月、ベルリンの森鷗外記念館。藤田撮影

「壁がなくなって西に行けるようになった時はみんな興奮して、ああこれが資本主義のコーヒーね、いい香りと。でも統一が急にきて、平等な結婚ではなかった。民主主義と言っても、東で培われた体験は新しいドイツに入らなかった。東ドイツで偉かった人が、公安警察と関係あったんでしょとか言われて」

「統一後は日本語だけでなくドイツ語も勉強しないといけなかった。通貨や税金、法律などがみんな西の制度になって、役所に出す紙に書く言葉が全然わからなかった。ゼロから始まって、私たちは合わせるのにとっても忙しかった。西に入った東ドイツは、日本と同じ島国のようなものでした」



1990年7月、東ベルリンで再統一を控え、通貨を西ドイツ・マルクと交換しようと並ぶ人々=朝日新聞社

そして、ヴォンデさんは旧東ドイツ地域の現状を憂い、祖国への郷愁を語った。

「ポーランドとの国境にある故郷のグーベンでは、人口は私の子供の頃の半分(約1万7千人)になってしまった。大都市から離れた街には仕事がなく、砂漠みたいになっている。いとこの女性はライプチヒ大学で農業を勉強して地元で働くつもりが、統一後に農業組合がなくなって定職に就けず、いまは老人ホームで働いています」

「東ドイツの頃は集団的に働く場所があって、頑張れば表彰もされた。働きながら子供を産んでもクビはだめで、私には休職中に給料の8割が出て、出産祝いに1000マルクもらってアパートをきれいにした。再統一後の子供たちの世代にそこまでの安心はなくて、私も友人も孫の面倒を見るのに忙しいからなかなか会えません」



1976年頃、東ベルリンにあった東ドイツの労働者住宅=朝日新聞社

旧東ドイツ社会を知る世代の喪失感と、旧東ドイツで衰退する地域に住む若い世代の閉塞感が結びついているのではないかというのが、ヴォンデさんの考えだった。

「労働が誇りだった東ドイツの頃を知る人にとっては、失業は本当に恥ずかしい。いまの若者には実際に仕事がない。うちの車は中古だけど、あそこはベンツの新車を買ったというのが見えてしまう。壁の崩壊で結局こんなにだめになってしまったという雰囲気が、家庭や地域に生まれると、その気持ちを今の政府への批判という形で表現するんでしょうね」

ナチス時代に重なる今

私がドイツを訪れた2月中旬には、AfDが実際に旧東ドイツ地域で政治を揺るがした事件がメディアを賑わしていた。チューリングゲン州議会での首相（知事）選出投票で、昨年の州議選で第2党に躍進したAfDが支持する候補が、キリスト教民主同盟(CDU)の議員の票も得て当選。世論の反発ですぐ辞任に追い込まれたにせよ、国政与党のCDUが、新興右翼政党のAfDと組んで指導者を生んだ形になった。

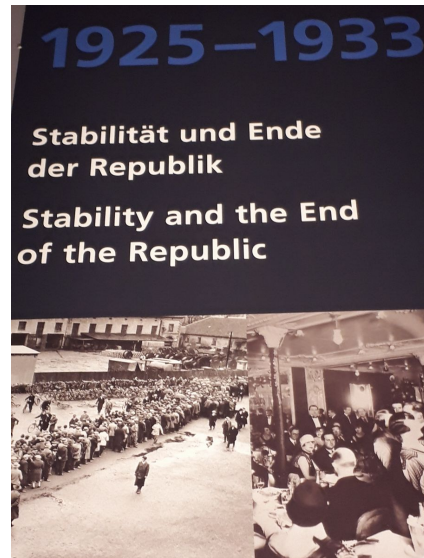
ヴォンデさんはヒトラーが台頭した100年前のドイツを、今に重ねた。

「1920年代は世界恐慌への対応で政治が混乱し、共産主義者と社会主義者がけんかし、政権を担う保守派がナチスの人気に頼った。2020年になって起きたチューリングゲンの問題はそれに似ている。しかも今はSNSでつながっているように見えて忙しくなるばかりで、どんどんアトマイズされてみんな不安になっている」

「アトマイズ」と聞き、はっとした。ヴォンデさんはその言葉を、社会が「原子」のように細分化されていくという意味で使った。

私はナショナリズムを考える時にたびたび立ち返る、ドイツ出身の社会心理学者エーリッヒ・フロムが唱えた「自由からの逃走」という概念を思い出した。

近代国家において互いに平等な国民となり、自由を得たはずの人たちがなぜ、全体主義に屈したのか。フロムはナチス・ドイツから逃れ、第二次大戦のさなかの1941年に米国で著した同名の書で、ナチズムの背景をこう分析した。

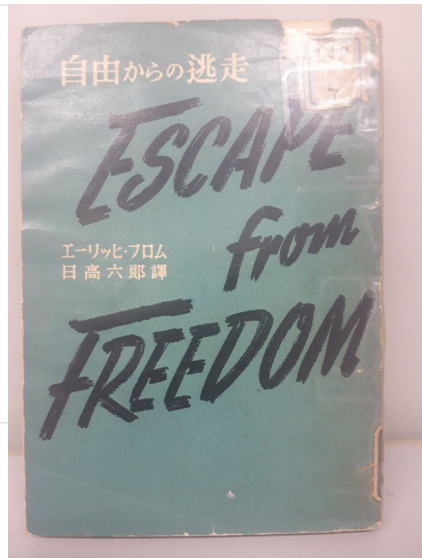


ベルリンの国立ドイツ歴史博物館の展示

近代人は伝統的権威から解放され「個人」となったが、同時に孤独な無力なものになり、自分自身や他人から引きはなされた、外在的な目的の道具となった。さらにこの状態は、かれの自我を根底から危うくし、かれを弱め、おびやかし、新しい束縛へすすんで服従するようにする。（「自由からの逃走」 日高六郎訳、1951年、創元社）

では、近代国家で国民がまとまろうとするナショナリズムにおいて、国民がそうした服従の闇に囚われないようにするには、どうすればいいのか。フロムはこうも述べている。

しかし人間は、かれを一個の「原子」にしてしまった世界に生きているだけでなく、同時に、一人の個人となるあらゆる可能性をあたえるような世界に生きている。近代の産業組織は本質的に、（中略）人間の知的、感性的、感情的な潜在力を十分に表現するための物質的基礎を創造する力をもっている。（同著）



つまり、近代国家を構成する「原子」となった国民が「自由からの逃走」から踏みとどまるには、国民自身の覚悟が必要になる。

どういう国家を目指すのかという理念を、国民自身が紡がねばならない。さらに、その理念の追求は決して、自国民がどうかに関係ないあらゆる人権と、他国との協調を犠牲にする形であってはならない。それが、戦後ドイツがナチズムから重層的に得た教訓だったはずだ。

その教訓は、冷戦で分断されたドイツの西側では、ナチス時代からの世代交代を経て民主主義を陶冶する手がかりとなった。東側でも唱えられたが、共産主義を守ることで自国が目的化した国家が国民の人権を虐げる倒錯が生まれた。その象徴だったベルリンの壁を、自由を求める東側の人たちが崩した。



1989年10月頃、「壁」が壊されたベルリンのポツダム広場に多くの人たちが集まった＝朝日新聞社

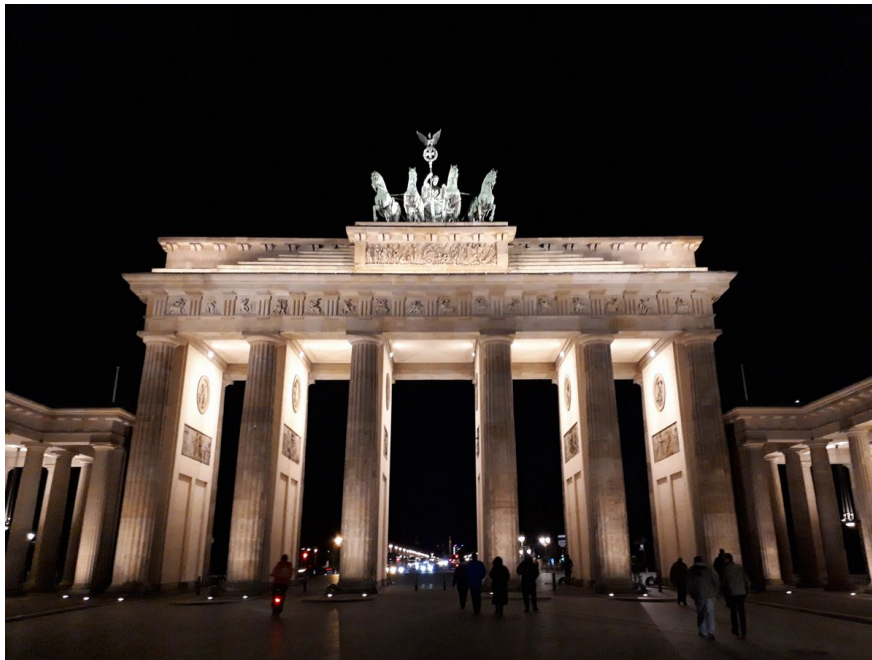
再統一されたドイツがナチズムの教訓を背負って30年。まだ東ドイツで過ごした年月の方が長いヴォンデさんにすれば、東ドイツにはあった国民のまとまりに代わるものが、いまだ見えてこない。

「このドイツはあと10年で東ドイツと同じぐらいの長さになる。そのころ、この国はどうなっているんでしょうね……」

統一30年、続く「ドイツ問題」

2時間にわたって話を聞くうちに、すっかり陽が落ちた。ヴォンデさんに定年退職をねぎらう花束を渡して森鷗外記念館を辞し、陽が落ちたベルリン市街をホテルへと歩いた。

シュプレー川に架かる橋を南へ渡り、ベルリン中心部を東西に貫くウンター・デン・リンデン通りに出ると、右手にライトアップされたブランデンブルク門が見えた。左手の遠くには、プロイセン王国時代からのブランデンブルク門とともに「再統一ドイツの象徴」とよく紹介される、東ドイツの頃に築かれたテレビ塔が夜空に光っていた。



ベルリンのブランデンブルク門＝2月。藤田撮影



そのテレビ塔の方へ折れ、手前にある国立ドイツ歴史博物館の方へ歩きながら、私は展示にあった「ドイツ問題は解決されないままだった」という一文を思い出していた。冷戦初期のコーナーで、ドイツ降伏後の連合国4カ国による分割占領が、そのまま東西の分断に移行してしまったという意味だった。

博物館の展示は1990年の再統一の歓喜のシーンで終わっていた。だが、ヴォンデさんの65年の人生に触れたばかりの私には、今も「ドイツ問題」は続いているように思えた。

※ 次回は8月27日に公開予定です。

[【連載】ナショナリズム ドイツとは何か](#)

[【昨年の連載】ナショナリズム 日本とは何か](#)

コメント [利用規約](#)

コメントを入力する(最大500文字)

コメント投稿時には、利用規約を確認・同意したものとみなさせていただきます。

0/500

名前(任意30文字以内)

[規約に同意して投稿する](#)

Powered by [ユーザーローカルAIコメント](#)

レコメンド (提供: Outbrain)